第64回新潟画像医学研究会

日　時　平成23年6月18日（土）
午後2時～

会　場　万代シルバーホテル　5F
「万代の間」

Ⅰ．一　般　演　題

1　膵管内腫瘍栓を伴った腺房細胞癌の1例

山崎　元彦・高野　　徹・吉村　宣彦
青山　英史
新潟大学医歯学総合病院放射線科

症例は67歳，男性．左側腹部痛を主訴として前医を受診，膵尾部に粗大腫瘍を指摘され当院第一外科紹介入院となった．Dynamic studyでは腫瘍の充実部分は早期より淡く造影される比較的多血性の性状で，内部には広範な壊死を認めた．腫瘍と連続して膵体部の主膵管内を充填する充実性病変が認められ，拡散強調像で同部は高信号，ERCPでは主膵管の途絶面が乳頭状を呈しており，膵管内腫瘍栓が疑われた．外科的切除の結果，腺房細胞癌と診断され，ごく一部に高分化な内分泌腫瘍が併存していた．膵管内腫瘍栓を示す膵腫瘍の報告には腺房細胞癌と内分泌腫瘍が大半を占めており，両者の併存腫瘍の報告も認められる．しかし本症例のようにCTで膵管内腫瘍栓が指摘された報告例は極めて少ない．膵管内腫瘍栓の有無は膵腫瘍の質的診断に寄与し得る重要な所見であると考えられた．

2　当院における喀血に対するTAEの治療成績

高木　　聡・佐藤　和弘*・江部　祐輔*
高野　　徹**・佐藤　章子**
池田　洋平**
尾崎　利郎***・関　　裕史***
堀井　陽祐****
田﨑晃一郎*****

長岡赤十字病院放射線科
同　呼吸器内科*
新潟大学医歯学総合病院放射線科**
県立がんセンター放射線科***
県立中央病院放射線科****
県立新発田病院放射線科*****

【目的】当院における喀血に対するTAEの治療成績をretrospectiveに評価する．

【対象と方法】2006年1月～2010年6月までの間に喀血に対してTAEを施行した31患者につき，その治療効果をretrospectiveに検討した．内訳は男性：21例，女性：10例，年齢は40～89歳で平均66.4歳であった．基礎疾患は気管支拡張症：5例，細菌感染症：4例，真菌感染症：5例，抗酸菌感染症：6例，抗酸菌感染＋真菌感染症：1例，腫瘍：3例，特発性：7例であった．また，手技成功の正否に関与する因子について解析を施行した．

【結果】経過中，21名生存/10名が死亡し，内5例はTAE後の止血不良による呼吸器症状で死亡した．再喀血を呈した11例中7例は3週間以内に再喀血を来していた．初回TAEによる止血効果の正否に関与する因子としては，TAEの施行理由と，関与血管の動脈瘤状ないし血管腫状変化の有無が有意な因子として判定された．初回TAE後再喀血を来した症例につき，生存群と死亡群との間で因子の検定を施行したところ，追加TAEの有無が有意な因子と判定された．

【結論】喀血に対するTAEは有効な治療法であるが，初回TAEの止血効果不良の場合には予後不良となりうる．追加でのTAEが施行可能であれば，生命予後延長に寄与する可髄性がある．関与血管の動脈瘤状ないし血管腫状変化を呈している場合に，止血効果不良となりやすい傾向が疑われたが，今後症例の蓄積とさらなる検討が必要

と考えられる.

3 Dual Source CT（Definition Flash：シーメンス社）の使用経験；腹部 dynamic CT について

高野　徹・新田見耕太*・能登　義幸*
八木下裕子*
新潟大学医歯学総合病院放射線科
同　診療支援部放射線部門*

2009年10月より2管球を搭載したDefinition flashが稼働し，腹部ダイナミックCTを当初120kVpで撮影を始めたが，動脈優位相のコントラストが悪かった．このため，造影剤量を600mgI/kg BWに増量し，管電圧を100kVpに変更したところ，以前の東芝の機種とほぼ同程度となった．管電圧を下げることでノイズが目立つ画像となったが，逐次近似法を用いた画後処理ソフトにより，ノイズの軽減が可能となった．しかしこの画像処理により微小な横造の評価が困難な場合があり，今後の課題である．

4 マルチモダリティーの中のPET－CT診断

尾崎　利郎・関　裕史・古泉　直也
大井　博之・霜越　敏和，佐藤　辰彦
県立がんセンター放射線診断科

PET－CTは，機能画像と形態画像を合わせた複合検査である．PET単独の時代よりは向上したが，1回の検査ですべてが判断できるほど精度の高い検査ではない．今回提示するのは，1）非常に強いFDG集積を示したが，過去のCTとの比較で縮小を認めたので炎症性と判断できた症例，2）MRIで再発を確認されている病巣にはFDGがほとんど集積せず，FDGの高集積により新たな病巣を指摘できた症例，3）造影CTで指摘された病巣にFDGが集積しないので，胃がん（低分化腺癌）の再発と推測できた症例，である．いずれもPET－CTだけでは誤診もしくは見落としをした可能性があり，総合画像診断の重要性を実感させるものであった．

5 気管支肺分画症の胎児MRIの1例

麻谷　美奈・佐藤　章子・山崎　元彦
吉村　宣彦・青山　英史
新潟大学医歯学総合病院放射線科

限局性胎児先天性肺疾患のうち，気管支肺分画症は比較的頻度が低い．今回，我々は肺葉内肺分画症の1例を経験したので報告する．症例は30歳代，女性．妊娠25週の妊婦健診の超音波で胎児左肺に高エコー域を指摘され紹介受診した．以後，妊娠経過と共に病変部は徐々に不明瞭化した．妊娠32週のMRIのT2強調像で胎児左肺に肺底に広く接して扇状の高信号域を認め，肺門からの気管支肺血管の分布はみられず胸部下行大動脈からの異常血管が分岐，左下肺静脈への還流がみられ，肺分画症が疑われた．出生後のCT所見も同様で，病変部には含気がみられ，嚢胞部分はみられず肺葉内肺分画症と診断した．胎児期に発見される肺分画症は肺葉外肺分画症が多く肺葉内肺分画症は稀であるが，本症例は報告例に合致する所見を呈していた．

Ⅱ．特　別　講　演

1 ADCによらない胸腹部拡散強調画像

浜松医科大学医学部附属病院　放射線部
病院教授
竹原　康雄

2 脳科学と外科の融合による神経機能の画像化

旭川医科大学　脳神経外科学講座
教授
鎌田　恭輔